

大正期における外来語の増加に関する計量的分析

| | |
|-----|---|
| 著者 | ? 牧 |
| 雑誌名 | 国立国語研究所論集 |
| 号 | 6 |
| ページ | 1-18 |
| 発行年 | 2013-11 |
| URL | http://doi.org/10.15084/00000508 |

大正期における外来語の増加に関する計量的分析

鄧 牧

中南大学／国立国語研究所 外来研究員 [-2010.09]

要旨

先行研究では、大正期に入ってから、外来語は本格的に増加し始めたとされる。本研究では、日本初の外来語辞典及び新語辞典を含めた、大正期に刊行された10種の新語辞典を調査対象に17911語を抽出し、大正期を初期・中期・後期に分けてこの時期の外来語の増加について計量的考察を行った。新語辞典による調査を通して、大正初期の新語辞典に見られる外来語は、抽出語全体の8割近くを占めていることが明らかになり、その多くは明治期、及び明治以前の時代から日本語に入ったものだと考えることができた。そして、大正初期・中期・後期という時代ごとにそれぞれの特徴が観察された。

キーワード：大正期、外来語、新語辞典

1. はじめに

外来語の本格的な増加が始まったのは大正時代である（宮島達夫1967）という。日本語の語彙史において、大正期は漢語から外来語へと転換するターニング・ポイントであるとされる一方、明治期と昭和期を切り離して、大正期だけに焦点を当てた、その期の外来語に関する本格的な研究はほとんど行われていない。また、大正期に増加したと見られる外来語のうち、どのくらいの語が大正期に入ってから日本語に導入されたのか。それを明らかにするために、日本初の外来語辞典及び新語辞典を含めた、大正期に刊行された10種の新語辞典を調査対象に、大正期における外来語の増加について計量的考察を行うことにする。

2. 調査資料

2.1 新語辞典の出現

大正期の辞典類を資料として外来語を調査するに先立ち、明治期・大正期の辞典類の変遷をたどり、大正期の辞典類の全容を把握し、外来語関連の辞典を特定することが先決である。その手がかりとして、惣郷正明・朝倉治彦編『辞書解題辞典』（1977）を選んだ。その中から、大正期に刊行された辞典を全数抽出し、抽出した辞典を分類したうえ、それぞれの割合を調べた。その結果は表2のようになる。そして、大正期の辞典類の特徴をよりよく把握するために、明治期の辞典類との照合を行うのが最適だと考える。前述の方法で、明治期に刊行された辞典類をすべて抽出し、その結果を表1のようにまとめた。

表1 明治期の辞典類

| 分類 | 辞典数 (%) | 例示 |
|-----------------------|------------|--|
| 国語辞典類 (国語・漢字・漢和) | 231 (31.5) | 『布令字弁』1868, 『広益字林大成』1877, 『漢語増補大全早引節用集』1879, 『東京会玉篇』1883 |
| 外国語辞典類 (対訳・外国語) | 172 (23.5) | 『和独対訳辞林』1877, 『増補訂正英和字彙』1882, 『漢和英字書』1884, 『仏和辞書』1886 |
| 専門語辞典類 (工学・法律・医学等) | 194 (26.5) | 『動物字彙』1878, 『五国対照兵語字書』1881, 『哲学字彙』1881, 『工学字彙』1888 |
| 実用百科辞典類 (百科・参考書) | 68 (9.3) | 『現代作歌辞典』1881, 『大日本百科辞書』1891, 『作文宝典』1897, 『日本家庭百科事彙』1906 |
| その他 (人名・ほか) | 68 (9.3) | 『皇朝姓氏新編』1870, 『猶太国地人名抄』1877, 『征露従軍必携戦地宝典』1904 |
| 合計 | 733 (100) | |

表2 大正期の辞典類

| 分類 | 辞典数 (%) | 例示 |
|-----------------------|------------|--|
| 国語辞典類 (国語・漢字・漢和) | 92 (23.6) | 『国民必携類語大辞典』1913, 『大日本国語辞典』1914, 『新撰会玉篇大全』1913 |
| 外国語辞典類 (対訳・外国語) | 89 (22.8) | 『大正独和辞典』1912, 『新撰英和辞典』1913, 『蒙和辞典』1917, 『支那語大辞彙』1914 |
| 専門語辞典類 (工学・法律・医学等) | 114 (29.2) | 『博物学辞典』1912, 『法律経済新字典』1912, 『臨床眼科医典』1912, 『国民商業辞典』1913 |
| 実用百科辞典類 (百科・参考書) | 38 (9.7) | 『常識大辞典』1913, 『大正百科辞典』1916, 『文章大観』1912, 『草書大辞典』1913 |
| 新語辞典類 | 17 (4.4) | 『外来語辞典』1914, 『ポケット顧問 や、此は便利だ』1914, 『新しい言葉の字引』1918 |
| その他 (人名・ほか) | 40 (10.3) | 『日本画家大辞典』1913, 『大正人名辞典』1914, 『新案演説辞典』1914, 『健康法辞典』1919 |
| 合計 | 390 (100) | |

表1と表2を照らし合わせてみれば、近代国語辞典の誕生、外国語辞典の発展、専門語・百科辞典の続出といった明治辞典の発展の流れを受け継ぎ、大正期に発行された辞典は、専門語辞典類・国語辞典類・外国語辞典類を主流としていることが分かった。また、明治期の辞典類では見当たらなかった新語辞典類は、大正期に入ってから、少数ながら現われるようになったというのは大正期辞典類の大きな特徴と言える。

新語辞典について、松井栄一(1988)は、大正の初めから昭和10年代にかけての約30年間に数多く出版された新語中心の小辞典類であると指摘し、その多くは、新語、モダン語、尖端語、現代語、流行語、新聞語、社会語などの語を書名に用いるという説明を加えている。そして、松井栄一(1991)の調査によって、「大正期には新語の五割近くを外来語が占めるようになり、昭和期に入ると六割を超えるようになった」という結果が得られており、新語辞典に占める外来語の割合が大きいことが分かった。

大正期の辞典類において、新語辞典は決して主流とは言えないが、大正期は新語辞典が誕生、

さらに発展していた時期であり、新語辞典についての研究は大正期語彙研究の良い視点になると考えられる。また、本研究は大正期の外来語を研究対象とするため、外来語の見出し語が大半を占める新語辞典は研究目的に合致していると言えよう。

2.2 調査資料の選定

新語辞典について、松井（1988, 1989, 1990, 1991）の「新語辞典の性格」についての一連の研究がなされ、それらをまとめたものとして、松井・曾根・大屋（1996）『新語辞典の研究と解題』が出版された。本稿では、惣郷正明・朝倉治彦編（1977）の研究と松井・曾根・大屋（1996）の研究を照らし合わせ、大正期の新語辞典について整理し、調査辞典の主要候補を集めた。さらに、外来語の比率と辞典の独自性との二つの点を考慮し、大正期に刊行された辞典候補から本研究の調査辞典を10種選出した。辞典に関する基本情報を表3のようにまとめることができる。

表3 調査辞典一覧

| 年代 | 番号 | 辞典名 | 編著者名 | 出版社 | 出版年月 | 収録語数 |
|----|------|-----------------|--------------|--------|-------------------|------|
| 初期 | I | 日用舶来語便覧 | 棚橋一郎 鈴木誠一 | 光玉館 | 1912.4 | 1500 |
| | II | 文学新語小辞典 | 生田弘治 | 新潮社 | 1913.10 | 1400 |
| | III | 外来語辞典 | 勝屋英造 | 二松堂書店 | 1914.2 | 7000 |
| 中期 | IV | ポケット顧問 や、此は便利だ | 下中芳岳 | 平凡社 | 1918.8 (改訂再増補) | 1400 |
| | V | 現代新語辞典 | 時代研究会 | 耕文堂 | 1919.2 | 2600 |
| | VI | 訂正増補新しい言葉の字引 | 服部嘉香 植原路郎 | 実業之日本社 | 1919.3 | 2350 |
| 後期 | VII | 新しき用語の泉 | 小林花眠 | 帝国実業学会 | 1922.12 | 8800 |
| | VIII | 英語から生れた新しい現代語辞典 | 上田由太郎 | 駸々堂出版部 | 1925.1 | 2500 |
| | IX | 大増補改版新しい言葉の字引 | 服部嘉香 植原路郎 | 実業之日本社 | 1925.3 | 2950 |
| | X | 最新現代用語辞典 | 秋山湖風 太田柏露 | 明光社 | 1925.5 | 3460 |

本稿では、この10種の新語辞典を対象に外来語の抽出作業を行った。大正期に刊行された全10種の新語辞典から延べ17911語を抽出することができた。その語数は辞典収録語総数の53%を占めていることが分かる。そして、この17911語の外来語は本稿の研究対象に当たるものである。

また、本稿では、表3に示されているように大正期をさらに初期・中期・後期に細分してみた。大正期の時代区分について、南博（1965）では、第一次大戦（1918年）以前を第一期とし、それ以降関東大震災（1923年）までを第二期とし、それ以降を第三期としている。この区分は第一次世界大戦と関東大震災という二つの歴史的事件を境界線にし、「大正文化」を研究対象とする際の時代区分であると考えられる。本稿では、大正期の新語辞典の刊行状況に基づき、大正期に最も影響力のあった出来事とされる第一次世界大戦を基準にし、第一次世界大戦勃発前（1914

年) までを初期, 大戦後のパリ講和会議 (1919 年) までを中期, 終戦後 (1920 年) 以降を後期とする。

3. 抽出語の初出辞典の分布

ここでは, 外来語は大正期の新語辞典にいつ収録されるようになったかに注目し, 個々の外来語が初出となる辞典について検討する。前述のように, 調査対象である大正期の 10 種の新語辞典から, 延べ 17911 語の外来語を抽出することができた。そのうち, 複数の辞典に収録されている外来語が多数存在するため, 最初に現われた辞典で一度だけ加算し, その後の辞典に出た重複語を記入しないことによって, 個々の外来語が初出となる辞典が割り出される。抽出語の初出辞典別分布の結果をまとめたのが次の表 4 である。

表 4 抽出語の初出辞典の分布

| 年代 | 辞典 | 出版年 | 収録語数 | 初出語数 | 比率 (%) | 語例 |
|----|------|------|-------|------|--------|-------------------|
| 初期 | I | 1912 | 1284 | 1284 | 100 | アーク灯 バーゲン・デー ホテル |
| | II | 1913 | 898 | 633 | 70.5 | アーティスト アイコノクラズム |
| | III | 1914 | 5205 | 3532 | 67.9 | アイディア アイディアリスティック |
| 中期 | IV | 1918 | 789 | 108 | 13.8 | エスカレーター ダイヤ ヨーグルト |
| | V | 1919 | 1467 | 48 | 3.3 | アーグス・カメラ キネマ クリップ |
| | VI | 1919 | 1166 | 264 | 22.6 | アーセミン インターホン チップ |
| 後期 | VII | 1922 | 2787 | 601 | 21.6 | アパートメント・ハウス アルバイト |
| | VIII | 1925 | 1272 | 99 | 7.8 | チェーン・ストア ファン ビタミン |
| | IX | 1925 | 1727 | 244 | 14.1 | アイス・ボックス シナリオ ラジオ |
| | X | 1925 | 1316 | 129 | 9.8 | アンテナ カルピス スリー・ベース |
| 合計 | | | 17911 | 6942 | | |

I: 日用舶来語便覧 (1912) II: 文学新語小辞典 (1913) III: 外来語辞典 (1914) IV: ポケット顧問 や、此は便利だ (1918) V: 現代新語辞典 (1919) VI: 訂正増補新しい言葉の字引 (1919) VII: 新しい用語の泉 (1922) VIII: 英語から生れた新しい現代語辞典 (1925) IX: 大増補改版新しい言葉の字引 (1925) X: 最新現代用語辞典 (1925)

表 4 で分かるように, 初出語の割合がずば抜けて高いのは I 『日用舶来語便覧』, II 『文学新語小辞典』, III 『外来語辞典』 の 3 種で, いずれも 6 割を超えている。それに次ぐのは 2 割台の VI 『訂正増補新しい言葉の字引』, VII 『新しき用語の泉』 であるが, 初出語の占める比率は大幅に下がっていることが分かる。IX 『大増補改版新しい言葉の字引』, IV 『ポケット顧問 や、此は便利だ』 の初出語は 1 割を超えており, X 『最新現代用語辞典』, VIII 『英語から生れた新しい現代語辞典』, V 『現代新語辞典』 の 3 種の初出語はみな 1 割に達していない。

また, 表 4 で 10 種の辞典を通してみれば, 初出語の割合は年代が下るにつれて低くなる傾向があると言えよう。以下, 初出辞典の分布の特徴について, 大正時代を「大正初期」「大正中期」「大正後期」に分けて分析を行いたい。

4. 大正初期の外来語

本稿では、大正元年（1912）から第一次世界大戦勃発前（1914）までの期間を大正初期とする。日露戦争は日本の資本主義にとって、発展の一つの道標であったとされ、日本の数倍もの軍事力を持つ大国であるロシアに大勝利することによって、日本は他の資本主義列強と肩をならべるようになった。「富国強兵」というスローガンを現実のものとした表の成功と裏腹に、日本政府は多大な犠牲を払ったにもかかわらず、賠償金が取れなかったうえに、戦後不況に陥った¹。一方、帝国劇場の設立、三越呉服店のデパート化に象徴されるように、明治の国家的「文明」から大正の個人的「文化」へと進行していた。

こういった時代背景のなか、日本最初の外来語辞典『日用舶来語便覧』（1912）、日本初のコンパクトな文学用語兼外来語辞典『文学新語小辞典』（1913）、日本で最初に辞典名に「外来語」が使われた辞典『外来語辞典』（1914）の3種は、相次いで世に送られた。大正前期の新語辞典に見られる外来語の特徴を、以下の三点にまとめてみた。

4.1 8割近くは明治期からの外来語

表4に示されているように、大正初期に属する新語辞典にはI, II, IIIの3種がある。I『日用舶来語便覧』に収録される1284語はすべて初出語である。II『文学新語辞典』の収録語数は898語であるが、このうちの265語は先行の『日用舶来語便覧』においてすでに収録されているので、初出語と考えられるのは633語になる。初出語はこの辞典の収録語全体の70.5%にあたる。III『外来語辞典』に見られる初出語は3532語で、この辞典の収録語全体の7割近くを占めている。この3種の辞典を合わせてみると、大正前期の新語辞典において、初出語と考えられるのは計5449語で、初出語全体の78.5%を占めているのが分かる。

これだけの数の外来語は、大正期に入ってから大量に日本に輸入されたとは考えにくく、その多くは明治期ないし蘭学時代に遡る、長年にわたる外国語の蓄積があってこそその賜物であると考えられる。ただし、これまでは英和辞典を通して外国語として日本人の目に触れることが多く、このように、カタカナ外来語の形で新語辞典に収録されるという点では新しいところだと考える。

その裏付けとして、全10種の新語辞典にすべて収録されている語が挙げられる。その語数は80語であり、以下の通りである²。

インスピレーション (inspiration) インタレスト (interest) ウイスキー (whisky) エキス (extract) エックス光線 (X-ray) エレベーター (elevator) オーソリティー (authority) オゾン (ozone) カーテン (curtain) カード (card) カーブ (curve) ガイド (guide) カット (cut) カフェ (café) クーデター (coup d'état) クラシック (classic) ゲーム (game) コーラス (chorus)

¹ 南博『大正文化』（1965: 74）に、『我国金融の現状及改善』（井上準之助 1926）からの次の引用があった。「大正二年から四年まで続いた不況のなかで物価は低落し、銀行破綻が相次いだ。すでにみたやうに国家財政は、連年にわたる政府の財政整理にも拘らず、国債の利払いに追はれ、日本の対外的力といふものは、ほとんどつきて、行き詰まっていた。」

² 本稿の語例の表記は、『日本国語大辞典 第二版』を基準にし、現代仮名遣いに従うことにした。

コスメチック (cosmetic) ゴッド (god) コミッション (commission) コモン・センス (common sense) コルセット (corset) コロタイプ (collo type) コントラスト (contrast) サークル (circle) サーバント (servant) サラリー (salary) サロン (salon) ジアスターゼ (diastase) シーツ (sheet) シグナル (signal) システム (system) シンガー (singer) スイート・ハート (sweet heart) スイート・ホーム (sweet home) スイッチ (switch) スキー (ski) スケッチ (sketch) スタート (start) スタイル (style) スタンプ (stamp) ストライキ (strike) スフィンクス (sphinx) スプーン (spoon) タイプ (type) タイム (time) チケット (ticket) チャーチ (church) チャンス (chance) チャンピオン (champion) チョコレート (chocolate) テーブル・スピーチ (table speech) デザイン (design) バイオレット (violet) バニティー (vanity) ハネムーン (honey moon) ヒーロー (hero) プアー (poor) フィルム (film) フィロソフィー (philosophy) フォーク (fork) ポリシー (policy) ポリス (police) ボンネット (bonnet) マーク (mark) マーチ (march) マーチャント (merchant) マーブル (marble) マスク (mask) マントル (mantle) ミスター (mister) ミセス (Mrs.) メンバー (member) モデル (model) リズム (rhythm) ルビー (ruby) レベル (level) ワイフ (wife) ワイン (wine)

この 80 語が現代外来語辞典に収録されているかどうかを知るべく、『コンサイスカタカナ語辞典』(三省堂, 1994) (以下『コンサイス』と略す) で検証してみたところ, 80 語のいずれも『コンサイス』に収録されていることが分かった。一方、『日本国語大辞典 第二版』(小学館, 2000 年) (以下『日国』と略す) を用いて, 80 語の初出例を調べた。その初出例及び年代は表 5 の通りである。

表 5 80 語の初出例一覧 (『日国』による)

| 見出し語 | 初出例 | 年代 | 見出し語 | 初出例 | 年代 |
|-----------|---------|-----------|------------------|----------|------|
| インスピレーション | 日本絵画の未来 | 1890 | インタレスト | 嚼水冷語 | 1899 |
| ウイスキー | 西国立志編 | 1870-71 | エキス | 植学啓原 | 1833 |
| エックス光線 | 多情多恨 | 1896 | エレベーター | 風俗画報 | 1890 |
| オーソリティー | 哲学字彙 | 1881 | オゾン | 医語類聚 | 1872 |
| カーテン | 金色夜叉 | 1897-98 | カード ³ | 舶来語便覧 | 1912 |
| カーブ | 明六雑誌 | 1874 | ガイド | 朝野新聞 | 1889 |
| カット | 舶来語便覧 | 1912 | カフェ | 米欧回覧実記 | 1877 |
| クーデター | 毎日新聞 | 1888 | クラシック | 文海の藻屑 | 1890 |
| ゲーム | 美辞論稿 | 1893 | コーラス | 内地雑居未来之夢 | 1886 |
| コスメチック | 東京風俗志 | 1899-1902 | ゴッド | 古道大意 | 1813 |
| コミッション | 福翁自伝 | 1899 | コモン・センス | 福翁百話 | 1897 |
| コルセット | 藪の鶯 | 1888 | コロタイプ | 風俗画報 | 1900 |
| コントラスト | 筆まかせ | 1884-92 | サークル | 舶来語便覧 | 1912 |

³ 表 5 で網掛けになっている見出し語は, その初出例が大正以前でないものを示している。

| | | | | | |
|-----------|-------------------|---------|----------|---------|-----------|
| サーバント | 欧米印象記 | 1910 | サラリー | 社会百面相 | 1902 |
| サロン | 米欧回覧実記 | 1877 | ジアスターゼ | 吾輩は猫である | 1905-06 |
| シーツ | 不如帰 | 1898-99 | シグナル | 和蘭皿 | 1904 |
| システム | 物理学術語和英仏 独対訳字書 | 1888 | シンガー | 当世書生氣質 | 1885-86 |
| スイート・ハート | 女子参政屢中楼 | 1889 | スイート・ホーム | 福翁百話 | 1897 |
| スイッチ | 舶来語便覧 | 1912 | スキー | 伸子 | 1924-26 |
| スケッチ | 忘れえぬ人々 | 1898 | スタート | 学生時代 | 1918 |
| スタイル | 筆まかせ | 1884-92 | スタンプ | 東京朝日新聞 | 1907 |
| ストライキ | 民情一新 | 1879 | スフィンクス | 外来語辞典 | 1914 |
| スプーン | 航来日録 | 1860 | タイプ | 覚書 | 1875-78 頃 |
| タイム | 徳川氏時代の平民 的理想 | 1892 | チケット | 西洋旅案内 | 1867 |
| チャーチ | 自由之理 | 1871 | チャンス | 日本文学支骨 | 1893 |
| チャンピオン | 筆まかせ | 1884-92 | チョコレート | 米欧回覧実記 | 1877 |
| テーブル・スピーチ | 舶来語便覧 | 1912 | デザイン | 大津順吉 | 1912 |
| バイオレット | 金色夜叉 | 1897-98 | バニティー | 人心の疑惑 | 1903 |
| ハネムーン | 花柳春話 | 1878-79 | ヒーロー | 小説神髓 | 1885-86 |
| プアー | 青春 | 1905-06 | フィルム | 秘密 | 1911 |
| フィロソフィー | 契利斯督記 | 1797 | フォーク | 栄力丸漂流記談 | 1856 |
| ポリシー | 明六雑誌 | 1874 | ポリス | 英政如何 | 1868 |
| ボンネット | 東京日日新聞 | 1888 | マーク | それから | 1909 |
| マーチ | 遺言 | 1900 | マーチャント | 緑囊談 | 1888 |
| マーブル | 西国立志編 | 1870-71 | マスク | 青年 | 1910-11 |
| マントル | 舶来語便覧 | 1912 | ミスター | 西洋道中膝栗毛 | 1870-76 |
| ミセス | 藪の鶯 | 1888 | メンバー | 西国立志編 | 1870-71 |
| モデル | 当世媛鏡 | 1894 | リズム | 近代科学の傾向 | 1912 |
| ルビー | 浮城物語 | 1890 | レベル | 舶来語便覧 | 1912 |
| ワイフ | 遣米使日記 | 1860 | ワイン | 西洋衣食住 | 1867 |

表5から分かるように、『日国』に示された初出例によると、80語のうちの68語は、その初出例が大正以前となっている。大正期に初出例が見られる語では「カード」「カット」「サークル」「スイッチ」「テーブル・スピーチ」「マントル」「レベル」の7語が、初出文献は『日用舶来語便覧』⁴(1912)であると記されている。「デザイン」「リズム」の2語は、それぞれ『大津順吉』(1912)、『近代科学の傾向』(1912)という『日用舶来語便覧』と同年代の文献が初出例として掲載されている。なお、「スキー」「スタート」「スフィンクス」について、その示された初出例はそれぞれ『伸子』(1924-26)、『学生時代』(1918)、『外来語辞典』(1914)となっており、いずれも『日用舶来

⁴『日国』では『舶来語便覧』(1912)と記されているが、その正式名称は『日用舶来語便覧』で、本稿の調査辞典『日用舶来語便覧』(1912)と同書である。

語便覧』より遅いことが分かった。

つまり、大正初期の新語辞典に見られる外来語は初出語全体の8割近くを占めていることが明らかになり、その多くは明治期、及び明治以前の時代から日本語に入ったものだと考えられる。

4.2 社会思想用語が多く出始めた

大正初期の外来語の大きな特徴として挙げられるのは、主義や学説に関する社会思想用語が数多く出始めたということである。たとえば、初期の新語辞典に次のような外来語が収録されている⁵。

ストライキ……同盟罷工 Strike (英) 資本主義に対して要求を迫り又は資本主に対する報酬等の手段として労働者が団結して職務を休止すること即ち同盟罷工なり。又転じて雇人生徒若くは配下の者等が団結して業を休むことにも用ふ。〔ストライク〕(『日用舶来語便覧』1912)

ヒューマニズム 人文主義, 人道主義。Humanism, (英) (『文学新語小辞典』1913)

キャピタリズム (Capitalism) [英] 資本主義。資本万能主義。(『外来語辞典』1914)

アナーキスト (Anarchist) [英] 無政府論者。無政府主義者。(『外来語辞典』1914)

初期の辞典のうち、I『日用舶来語便覧』では、主義・学説に関する語は「ストライキ (strike)」 「デモクラット (democrat)」 「ナチュラリズム (naturalism)」 「プラグマティズム (pragmatism)」 「ボイコット (boycott)」 「モンロー主義 (Monroe Doctrine)」 の6語しか見当たらない。II『文学新語小辞典』になると、「アイコノクラズム (iconoclasm)」 「アナーキズム (anarchism)」 「コミュニズム (communism)」 「センチメンタリズム (sentimentalism)」 「ヒューマニズム (humanism)」 のような主義・学説を表す語は38語に膨らんだ。さらに、翌年刊行されたIII『外来語辞典』では、「キャピタリズム (capitalism)」 「ジンゴイズム (jingoism)」 「デモクラシー (democracy)」 「ミリタリズム (militarism)」 「アナーキスト (anarchist)」 「コミュニスト (communist)」 「ニヒリスト (nihilist)」 などの社会思想用語は111語が収録されている。そして、この111語の中に、「ーイズム」を接尾辞とする主義・学説名の語に加えて、その主義・学説に携わる人を表す、「ーイスト」で終わる語も出ている。

4.3 種々の品詞の外来語が見られる

大正初期の初出語では、「イルミネーション」「エレベーター」「クリスマス」「デパートメント・ストア」「レストラン」「オリジナリティー」「ロマンス」「ダイヤグラム」「ベランダ」といった名詞が最も多いが、広範囲に収録されたそれ以外の品詞の外来語の存在も目に付く。たとえば、

エイティ……八十 Eighty (英) 数の名称なり。(『日用舶来語便覧』1912)

ツー 二。Two, (英) (『文学新語小辞典』1913)

⁵ 大正期の新語辞典からの引用例は、原語つづりに間違いが見られるものもあるが、調査辞典に掲載されているまま引用することにした。

- サーティ (Thirty) [英] 三十。(『外来語辞典』1914)
- エルダー (Elder) [英] 年上の。年長の。(『外来語辞典』1914)
- ティアフル (Tearful) [英] 涙いつばいの。涙に充てる。(『外来語辞典』1914)
- ディバイド……割るの義 Divide (英) 分つ, 割る, 算術に於て除することを云ふ。(『日用舶来語便覧』1912)
- アトラクト ひきつける事。Attract (英) (『文学新語小辞典』1913)
- ポピュラライズ (Popularize) [英] 通俗にす。人気を得るやうにす。はやらす。(『外来語辞典』1914)
- クリヤーリー 明瞭に。Clearly, (英) (『文学新語小辞典』1913)
- ストリクトリー (Strictly) [英] 厳密に。精確に。(『外来語辞典』1914)

のように、「イレブン (eleven)」「エイティ (eighty)」「エイティーン (eighteen)」「エイト (eight)」「サーティ (thirty)」「サーティーン (thirteen)」「サード (third)」などの数詞、「アグリー (ugly)」「エルダー (elder)」「ティアフル (tearful)」「ホーム・ライク (home like)」などの形容動詞、「アナライズ (analyze)」「コンペア (compare)」「シャット (shut)」「ディバイド (divide)」「ポピュラライズ (popularize)」などの動詞、「スキルフリー (skillfully)」「ストリクトリー (strictly)」「ナチュラルリー (naturally)」「ラショナルリー (rationally)」「リセントリー (recently)」などの副詞が初期の新語辞典に数多くおさめられている。また、こういった数詞・形容動詞・動詞・副詞は初期以降の後続辞書に引き続き収録されることが少なく、現代の辞典に現存すると見られるものも限られている。特に、現代辞典には普通収録されない動詞と副詞の外来語は、大正初期の新語辞典に積極的に収録されている。大正初期の新語辞典は広範囲にわたり、熱心に外来語を取り入れようと努力していたことがうかがえる。一方、初期の新語辞典においては、外来語と日本語との相性をあまり考慮せず、広範囲にわたって異なる品詞の外来語を集められるだけ集めたという印象を受ける。

5. 大正中期の外来語

本稿では、大正中期を、1914年の第一次世界大戦勃発から、大戦後の1919年パリ講和会議までの期間と規定する。この期の時代背景は「大戦景気」と言っても過言ではないだろう。戦争によってヨーロッパ諸国が中国大陸を中心とするアジア市場から撤退し、それを日本が穴埋めすることで、ヨーロッパ市場・アメリカ市場・アジア市場への諸物資の輸出が急増していた。さらに、戦争による船舶不足で、海運業や造船業が急伸していき、一躍大金持ちになる「船成金」がたくさん生れた。また、重化学工業やエネルギー産業は拡大充実し、目覚ましい発展を遂げた。この好況とともに、日本は戦前の債務国から債権国へとその立場をかえるに至った。文化の面では、マスコミ産業の前身とも言える文化産業が成立し、新聞、映画、出版、写真、レコードなどの大量販売によって、文化が国民の各層に普及するようになった。

この期間に刊行された新語辞典は3種あり、IV『ポケット顧問 や、此は便利だ』だけは大战

開始同年に初版刊行され、戦争期間を通して訂正増補が繰り返されているが、ほかの2種は大戦終了になってから刊行されるようになったのである。

5.1 新出の外来語が比較的少ない

表4で分かるように、大正初期と比べて、中期の新語辞典における初出語の割合はとても低い。IV『ポケット顧問 や、此は便利だ』は日本初の新語辞典で、外来語を789語収録しており、初出語と思われるのは108語で、1割強を占めている。V『現代新語辞典』ではじめて収録される外来語はわずか48語で、調査辞典の中で一番少ない。また、VI『訂正増補新しい言葉の字引』の初出語は264語で、2割強を占めており、大正中期では一番高い。このように、3種の辞典を合計してみると、大正中期の新語辞典に見られる初出語は計420語で、初出語全体のわずか6.0%を占めていることが分かる。中期の新語辞典に収録される外来語は、先行辞典を継承したものが多く、新出の外来語の語数が少ないということになる。その中から代表例を取り上げてみよう。

エスカレーター (Escalator) やや傾斜をもつた吊り梯子。昇降の具。近頃、エレベーターと同義に此の語を用ふるは間違ひ。(『ポケット顧問 や、此は便利だ』1918)

【カチューシャ】千八百九十五年に書かれた露国トルストイの傑作小説「復活」のヒロイン。憐い恋を追うて転々遂にシベリヤの荒野、獄裏に泣く身となつた。それに譬へて近頃では流転しつつ恋に泣く女をさしてカチューシャと呼ぶ。(『訂正増補新しい言葉の字引』1919)

【スペイン風邪】Spain Influenza (英) 千八百九十二年、バイフェル氏発見のインフルエンザ菌の作用に基づく流行性感冒で、危険性を供ひ肺炎を惹き起し、四十度以上の発熱四五日にして死去するものが往々ある。世界各国を通じて流行する悪性の病である所から世界風邪と云ひ、又大正に入つてから殊に激しいといふので「大正熱」「大正風邪」とも云ひ、学校は休校するまでに至つた所から「学校風邪」といふ名称さへ起こつた。(『訂正増補新しい言葉の字引』1919)

「エスカレーター」は1900年パリの万国博覧会に出品した米国のオーチス社の商標名からきたものとされ、竹村民郎(2004)では、大正3年(1914)の東京大正博覧会の最大の呼び物として、日本最初のエスカレーターが登場したと記している。それ以後、デパートに設置されるようになって、人々の関心が寄せられていた。その裏付けとなるのは、「エスカレーター」は1918年以降の6種の新語辞典にすべて収録されているということであろう。「カチューシャ」が流行語となった背景には、大正3年(1914)、帝国劇場における『復活』の上演に伴って、女優松井須磨子が歌った「カチューシャの唄」が流行し、人々の愛唱歌となったということがある。また、「スペイン風邪」は大正7年(1918)から翌年(1919)にかけて世界規模で流行した風邪で、『新しい言葉の字引』の初版(1918年10月)には見当たらないものの、訂正増補版(1919年3月)にはすでに収録されているのが分かる。

このほかに、「アパートメント・ハウス」「アークス・カメラ」「オール・バック」「キャストイング・ボード」「コダック」「チューイン・ガム」「チョコレート・キャラメル」「ワクチン注射」

といった語は大正中期の新語辞典に現われた初出語で、大正生まれの流行語である可能性が高いため、見過ごすことはできないであろう。

5.2 戦争色が弱く、時代性がよく現われる

第一次世界大戦という4年にわたる世界的な戦争が起きた割には、それに関連する外来語はそれほど多く見当たらないという特徴が見られる。たとえば、

スペース・ブローカー (Space broker) 空間仲買。船腹仲買の異称。大戦乱で船腹が不足を告げた。

目先の早い人達は、積荷をも持たず、船腹使用の約束を船腹会社と結んでおいて、実際に積荷を有する人が困つて居るのを見かけて、先の契約を高く売りつける。こんなことで出来上つた成金も世にはある。(『ポケット顧問 や、此は便利だ』1918)

【カムフラージュ】Camouflage (英) 佛語から出たもので欺謀術といふ意味である。欧州戦線では画家が大砲等を樹木雑草の色に塗り代へて敵の目を眩す事にいふ。(『訂正増補新しい言葉の字引』1919)

【タンク・ウィーク】Tank-week (英) タンク週と云つてゐる。英国などで戦時公債募集の示威運動のために御国自慢の怪物タンクを街上に走らせてその公告をしてゐるといふ話である。(タンク参照) (『訂正増補新しい言葉の字引』1919)

語釈にあるように、第一次大戦をきっかけに成金になった「スペース・ブローカー」や、戦争に使われた「カモフラージュ」や、公債募集のために現われた「タンク・ウィーク」などは、みな戦争の影響で現われた外来語で、当時の新語辞典に載せられていた。しかし、同じような戦争関連の言葉としては、「ドレッドノート型」「マーシャル・フィールド」「ウォー・ピクチャー」「ツェッペリン」「ド級艦」の5語だけしか挙げられない。社会生活に対する戦争の影響が大きい割には、戦争色の外来語は数が少ないということが言えよう。

それと対照的に、大戦景気もたらした経済関係、特に広告関係の語が多く辞書に載るようになった。たとえば、新語辞典には次のような語が収録されている。

【アド・ライター】Ad-writer (英) 欧米各国の商店に於て需要盛な広告文案掛。(『訂正増補新しいことばの字引』1919)

【アップ・トゥー・ミニット】Up to minute (英) 刻下の。速刻的。前項と同じ意味であるが一層切迫した語気を持つ。商用文、広告文などに散見する。(『訂正増補新しいことばの字引』1919)

ポスター (Poster) 広告絵。看板絵。近来、これを研究するもの益々多く、外国にては、第一流の芸術家すらその意匠に骨を折つて居る。(『ポケット顧問 や、此は便利だ』1918)

上にあるように、第一次大戦もたらした経済の繁栄、消費産業の発展などが原因で、広告への認識が高まっていた。大正3年(1914)、三越広告意匠展、大正6年(1917)、「福岡日日」意匠図案コンクールなど、広告の商業美術化がすすみ、大正期の華やかな広告面をつくりだす原動

力となったと考えられる。こういった広告産業の発展に伴って、前述の語例のほかに、「アド・マン」「アドバイザー」「アドバイジング・マネージャー」「ウィンドー・カード」「ウィンドー・トリミング」「サイレント・セールスマン」「ビラ」などの広告関連の語が生まれ、この時期の新語辞典に掲載されるようになった。

新語辞典に見られるこのような外来語の特徴は、日本にとっての第一次大戦は「あらゆる面で得した第一次世界大戦」だったという歴史的事実の如実な反映であると言える。

5.3 長い外来語が多く収録される

大正中期の外来語の特徴として見逃せないのは、「外+外+外」「外+外+外+外」「外+外+外+外+外」といった、二つ以上の構成要素による長い外来語の出現である。その主なものを例示すると、次の通りになる。

アップ・ツー・ミニット (up to minute) インターナショナル・ポリス・システム (international police system) グレート・ディタミネーション・セール (great determination sale) グレート・デパートメント・マネージャス・セール (great department manager's sale) グレート・テン・パーセント・ディスカウント・セール (great ten percent discount sale) グレート・ワン・セント・セール (great one cent sale) ザ・サマー・アジャストメント (the summer adjustment) セーム・カラー・ディスプレイ (same color display) ミニット・ディスプレイ・メソッド (minute display method) ドクトル・オブ・フィロソフィー (doctor of philosophy) バランス・オブ・トレード (balance of trade) リリー・オブ・ザ・バレー (lily of the valley) レビュー・オブ・レビュー (review of review)

上掲のように、大正中期の外来語は「外+外+外」をはじめ、「外+外+外+外」「外+外+外+外+外」のような長大な語まで出始めた。こういった語形の長い語は、一見難解で理解に苦しむものが多い。初出の辞典から語例を引用しておこう。

【セーム・カラース・ディスプレイ】 Same colors display (英) 装飾材料を悉く同じ色彩のものみにする陳列方法、白なら白、赤なら赤ばかりで装飾すると強い印象を与えるものである。

ホワイト・ディスプレイ White-display といへば全部白装飾。

グリーン・ディスプレイ Green-display といへば全部緑装飾。(『訂正増補新らしい言葉の字引』1919)

【バランス・オブ・トレード】 Balance of trade (英) 貿易差額。輸出貨物と輸入貨物との価格の相違をいふ。(『訂正増補新らしい言葉の字引』1919)

【グレート・テン・パーセント・ディスカウント・セール】 Great ten percent discount sale (英) 一割引大売出し。(『訂正増補新らしい言葉の字引』1919)

その中身を見てみると、「グレート・デパートメント・マネージャス・セール」など大売出しの広告や、「セーム・カラー・ディスプレイ」など展示の方法や、「バランス・オブ・トレード」

などの貿易用語など、広い意味での経済関係の用語が多いということにたどり着く。このような長大な外来語が中期の新語辞典に載せられている点から見て、大正期の外来語の活躍ぶりと、人々の外来語への関心がうかがえるであろう。

6. 大正後期の外来語

本稿では、第一次世界大戦終戦後の1920年から大正末年までの期間を大正後期とする。大戦景気が終わり、1920年3月の株価の暴落から戦後恐慌が始まり、投機景気に浮かれていた日本経済を一気にのみこんだ。それ以降、小さな変動・恐慌がたえず、慢性不況が続いていた。この時期に、新中間階級としての官吏、教員、サラリーマンなどがその数を増すとともに、「金銭的志向」が強く、個人の安楽な生活を守ろうとする傾向が強くなり、消費文化の発展に拍車をかけた。こういった時代背景の中で出版された新語辞典は4種ある。

6.1 戦時中に比べ初出語がやや増えた

表4に示されているように、大正後期に属する新語辞典は4種ある。VII『新しき用語の泉』に収録されている外来語の2割強は初出語で、601語ある。VIII『英語から生れた新しい現代語辞典』に見られる初出語は99語で、後期の辞典では最も少ない。IX『大増補改版新しい言葉の字引』の初出語は、大正期の辞典に収録された外来語全体の14.1%を占めており、244語ある。X『最新現代用語辞典』には、初出語と思われる語は129語あり、約1割を占めている。合計してみると、大正後期の新語辞典に収録されている初出語は合わせて1073語あり、初出語全体の15.5%を占めていることが分かる。つまり、大正後期の初出語の語数は、初期より少ないものの、中期と比べてみれば次第に増加していたことが明白である。その例として、次のようなものが見られる。

【テロリズム】 Terrorism (英) 凶暴政治、威嚇主義、などと訳する。即ち、暗殺をしたり、焼討をしたり、好んで過激の手段によつて、その政治上若しくは社会上の主張を遂行せんとする主義。Terrorist は凶暴政治家、又は凶暴政治を助ける人。(『新しき用語の泉』1922)

ビタミン (Bitamine) 一種の栄養素。生物の生長にはなくてはならぬもの。肉、果物、卵、野菜、海草等に多く含まれる。これにA B C三種の別あり、之を欠く時は忽ち栄養障害を起し、甚だしくなると死に至る。(『英語から生れた新しい現代語辞典』1925)

【アンコール】 Encore (佛) 猶ほ。更に。又更に。重ねての意味である。音楽会で、演奏者又は歌ひ手の一旦退出して幕の下りた後は、更に又、拍手で催促して呼び出す事をいふ。(『大増補改版新しい言葉の字引』1925)

【タクシ・ミーター】 Taxi-meter (英) タクシー即ち賃自動車に取りつけてあるメートル計算器の意。哩数と賃銀とを個別に又同時に表示する装置で、運転手台に在る。自動賃銭表示器と訳す。(『大増補改版新しい言葉の字引』1925)

カルピス (英) Calpis カルシウムとザルピスの字を取つた強壯飲料。乳酸成分に富んだものをいふ。(『最新現代用語辞典』1925)

これらの語は、複数の新語辞典には収録されていないが、後世に受け継がれて、日本語に定着したと見られる。そして、上掲の5語の中で、ここで特に注目したいのは、「カルピス」という乳酸菌を使った飲み物である。大正8年(1919)の七夕祭の日にカルピスという名の乳酸飲料が発売された。販売後まもなく使用された「カルピスは初恋の味」という名キャッチ・フレーズとともに、カルピスは大戦景気ではずんだ人々の心をつかみ、たちまち全国に広がった。こういった商品のヒットとともに、商品名「カルピス」も流行語となって辞典に載るようになったわけである。

このほかに、「オードブル」「カメラ・マン」「ダダイズム」「チョコレート・ウエハース」「トーナメント」「ハンガー・ストライキ」「ラジオ」「デビス・カップ」「デビュー」「ムース」「ビル」「レモン・ティー」「レジスター」といった語は、いずれも大正後期に出現したため、新語辞典における収録辞典数が1, 2種と少ないものの、現代でもよく見聞きする語として定着している。

6.2 視聴覚文化の進歩が反映される

第一次世界大戦後急速な進歩を見せたのは、写真・映画・レコード・印刷・ラジオといった視聴覚文化である。ここでは、特に映画とラジオの二つを取り上げてみよう。主な語例を以下のように掲げておく。

キネマ・カラー (kinema color) キネマ・ショー (kinema show) キネマ・ドラマ (kinema drama) キネマ・ニュース (kinema news) キネマ・ファン (kinema fan) サイレント・プレー (silent play) サティリカル・ドラマ (satirical drama) ラジオ (radio) シネマトグラフ (cinematographe) スクリーン (screen) スクリーン・サン (screen son) スクリーン・プレー (screen play) スクリーン・マザー (screen mother) デビュー (debut) ネーム・プレート (name plate) フォト・プレー (photo play) ムービー (movie) ムービング・ピクチャー (moving picture) ロケーション (location)

新時代流行の象徴の一つとされる「活動写真」は映画産業の確立、チャップリン喜劇の流行、映画スター第1号尾上松之助の誕生といったことによって、さらに人気を博していた。一方、大正11年(1922)より逓信省が放送事業の実現にとりかかり、大正14年(1925)3月にラジオ放送が開始されて、ラジオ時代の開幕を告げた。しかし、興味深いことには、「活動写真」「放送」に関する外来語は当時未だ一定していなかったようである。引用が少々長くなるが、後期の新語辞典には以下のような外来語が収録されている。

【キネマ】Kinema (英) Kinematograph の略。活動写真のこと。本来は、活動写真の普通名詞として、Animatograph, Biograph, Kinetoscope, Veriscope, Vitagraph, Cinematograph, Kinematograph の外五六語あつたが、シネマトグラフ (Cinematograph) とカイニマトグラフ (Kinematograph) との二つが行はれ、更にリビング・ピクチュアズ (Living pictures), モーション・ピクチュアズ (Motion pictures), ムーヴィング・ピクチュアズ (moving pictures), ムーヴィーズ (movies) などの新しい呼称が現はれ、又シネマ (Cinema), カイニマ (Kinema) などの略称が行はれる

やうになつた。それが日本に伝わつてからキネマ⁶といふ誤つた発音で通用する事になり、近年は活動写真など言ふと旧式と思はれ、映画（其項参照）とキネマの二つが専ら用ひられてゐる。Kinema は本来ギリシア語でキニマ・キニマトス（活動の意味）から出たので、ウェブスター大辞典にもキネマトグラフと発音符号をつけてゐるから、キネマも差支はないが、正しくはカイニマ、又はカイネマといふべく、Cinema の方は絶対にキネマと呼んではならないのである。キネマ・ファン。キネマ・ドラマ。キネマ・ニュースなどは必ず K の方を用ひた方がよい。（『大増補改版新しい言葉の字引』1925）

【シネマトグラフ】Cinematograph（英）「キネマ」を見よ。（『大増補改版新しい言葉の字引』1925）

【ムービー】Movie（英）活動写真の moving picture を略して、アメリカで作られた新語。「キネマ」を見よ。（『大増補改版新しい言葉の字引』1925）

ムービング・ピクチャー（Moving picture）活動写真のこと。（『英語から生れた新しい現代語辞典』1925）

【ラジオ】Radio（英）「レディオ」を見よ。（『大増補改版新しい言葉の字引』1925）

【レディオ】Radio（英）正しくはレイディオウである。Radiotelegram の略。無線電信・無線電話。一九二〇年以降アメリカでは無線電話が特に発達し、ロンドンの音楽や説教をニューヨークで聴くことも雑作がない位である。（『大増補改版新しい言葉の字引』1925）

ラジオ（英）Radio 無線電話。無線電信。一般には無線電話の意に用ひてゐる。これを転用して無線を無銭に通じた隠語にすることが流行してゐる。（『最新現代用語辞典』1925）

語釈を見て分かるように、「キネマ」「シネマトグラフ」「ムービー」「ムービング・ピクチャー」の4語は原語の異なる外国語によるもので⁷、同じく日本語で「活動写真」と訳されているものの、大正期の日本では、「キネマ」が最も一般的に使われていたと思われる。一方、「ラジオ」の場合、1925年3月のラジオ放送開始と同月に刊行された『大増補改版新しい言葉の字引』には「ラジオ」「レディオ」の二つの見出しが見られるものの、原語に因んだ発音表記だと考えられる。現代日本語の発音表記の「ラジオ」は同年5月出版の『最新現代用語辞典』によりやく現われた。そして、その訳語として当てられたのは「無線電信」と「無線電話」の二つで、「放送」という現代訳語は用いられていない⁸。当時、映画・ラジオ放送に対する関心が高かったからこそ、異な

⁶ 語釈の「キネマ」「キネマトグラフ」の下線は、原辞書『大増補改版新しい言葉の字引』にしたがって引いたものである。

⁷ 「日国」の調べでは、「キネマ」は英語由来の「kinematograph」の略、「シネマトグラフ」はフランス語「cinématographe」から来たもの、「ムービー」と「ムービング・ピクチャー」はそれぞれアメリカの「movie」「moving picture」に由来した語だと分かる。新語辞典の記述とは少々食い違いが見られる。

⁸ 「ラジオ」の訳語について、南博（1965: 242）では、「放送」という言葉がラジオの訳語として登場したのもこの時期であった。それまでは、統一された言葉がなく、「公布」・「拡布」・「拡散」・「弘宣」などが使われ、一部では音訳による「楽自翁」が当てられるほどだった」と記されている。筆者の新語辞典の調査では、『大増補改版新しい言葉の字引』には、「放送無電」が収録され、「放送無線電話又は電信の略。特定の許可を受けた受信設備のある所に無線電話を放送すること」と解釈されている。『最新現代用語辞典』には「放送」が収録され、「無線電話、電信の電波を受話器受信器に送ること。英語のブロード・キャスティング（broadcasting）の訳」とある。つまり、大正後期の新語辞典では、「ラジオ」イコール「放送」という直線的な関係が未だ成り立っていないと言えよう。

る原語からの外来語や、異なる発音表記の外来語が見出し語として新語辞典に収録されていたと思われる。

6.3 外来語の省略形が現われた

大正後期の新語辞典に以下のような外来語の省略形が現われたのは留意すべき点である。

シリン (Cylinder) の略で時計の機械。アンクル (其項参照) より劣る。(『英語から生れた新しい現代語辞典』1925)

【ビル】ビルディング Building の略称。東京の丸ビル (丸の内ビルディング)、大阪の堂ビル (堂島ビルディング) など。大正十一年秋丸ビルの完成した頃から始まった呼び方である。(『大増補改版新しい言葉の字引』1925)

【アパートメント】Apartment (英) 部屋。室。割貸間。又、アパートメント・ハウスの略称。(『大増補改版新しい言葉の字引』1925)

マス (Masturbation) の略。手淫の隠語。(『英語から生れた新しい現代語辞典』1925)

チツク (Cosmetic) の略。化粧品。脂粉。(『英語から生れた新しい現代語辞典』1925)

テキ (Beef steak) ビフテキの略。(『英語から生れた新しい現代語辞典』1925)

【ビフテキ】「ビーフ・ステーキ」を見よ。(『大増補改版新しい言葉の字引』1925)

プロ・ブル プロはプロレタリア又はプロレタリアートの略称。ブルはブルジョア又はブルジョアジーの略称 (各其項参照)。(『英語から生れた新しい現代語辞典』1925)

語例で分かるように、後期では外来語の省略形に三つのパターンが見られる。一つ目は、「シリン (シリンダー)」「ビル (ビルディング)」のように前部保留、後部省略のもの、「アパートメント」「マス」もこのパターンのものである。二つ目は、「チツク (コスメチック)」「テキ (ビフテキ)」といった前部省略、後部保留のものである。三つ目は、「ビフテキ (ビーフ・ステーキ)」「プロ・ブル (プロレタリア・ブルジョア)」など、複合される二つの語から一部を取り出し、さらに組み合わせるといったパターンである。大正後期において、語数はまだ限られているものの、省略形及び現代日本語にも相通じる省略パターンが出現し、辞書に載るようになったことから、当時の外来語の発達状況がうかがえる。

7. 終わりに

大正期に入ってから、新語辞典が相次いで世に送られていた。本稿では、大正期の新語辞典に収録されている外来語を対象に、その増加について計量的考察を試みた。小論で述べてきたことを次のようにまとめる。

(1) 先行研究では、大正期に入ってから、外来語は本格的に増加し始めたとされる。本研究の新語辞典による調査を通して、大正初期の辞書に見られる外来語が抽出語全体の8割近くを占めていることが明らかになり、その多くは明治期、及び明治以前の時代から日本語に入ったものだと考えることができた。それに対して、大正期に入ってから、日本語に導入されたと見られる外来

語は凡そ2割を占めていることになる。

(2) 大正初期・中期・後期という時代ごとにそれぞれの特徴が見られる。大正初期の外来語には、すでに主義や学説を表す社会思想用語が数多く出始めていた。大正中期の場合、第一次世界大戦関連の語が少なく、大戦景気もたらした経済関係、特に広告関係の語が多数見られた。大正後期の外来語の特徴として、映画、ラジオといった視聴覚文化の進歩による外来語が多く現われたということが挙げられる。

(3) 外来語の形態的特徴から見れば、大正期の新語辞典においては、種々の品詞の外来語を広範囲に収録すること、語形の長い外来語を多く収録すること、外来語の省略形及び省略パターンが出現したこと、といった特徴が観察された。

(4) 大正期の新語辞典は当時人気を博し、再版が繰り返されるたびに、積極的に新しい外来語が取り入れられていた。それらの外来語は大正期の日常用語になったと同時に、大戦景気による経済発展、高揚する社会思想と社会運動、視聴覚文化の進歩、消費社会の成立といった大正社会の輪郭を描いていた。

(5) 大正期の外来語の活躍ぶりが垣間見られる、語形の長い外来語や動詞・副詞の外来語は積極的に新語辞典に収録されていた。その積極的な態度と裏腹に、これらの語は結局、日本語との相性が好ましくなく、日本語に定着せずに消えてしまったのである。

参考文献

- 松井栄一 (1988) 「新語辞典の性格—大正期を中心に—」『山梨大學教育學部研究報告』39: 7-16.
 松井栄一 (1989) 「新語辞典の性格 (2)」『山梨大學教育學部研究報告』40: 1-11.
 松井栄一 (1990) 「新語辞典の性格 (3)」『山梨大學教育學部研究報告』41: 1-9.
 松井栄一 (1991) 「新語辞典の性格 (4)」『山梨大學教育學部研究報告』42: 1-10.
 松井栄一・曾根博義・大屋幸世 (1996) 『新語辞典の研究と解題』東京：大空社。
 南博 (1965) 『大正文化』東京：社会心理研究所。
 宮島達夫 (1967) 「現代語いの形成」『ことばの研究』3: 165-171. 東京：秀英出版。
 三省堂編修所 (編) (1994) 『コンサイスカタカナ語辞典』東京：三省堂。
 小学館国語辞典編集部 (編) (2000) 『日本国語大辞典 (第二版)』東京：小学館。
 惣郷正明・朝倉治彦 (編) (1977) 『辞書解題辞典』東京：東京堂出版。
 竹村民郎 (2004) 『大正文化 帝国ユートピア—世界史の転換期と大衆消費社会の形成—』東京：三元社。

A Quantitative Research on the Increase of the Taisho Period Loanwords

DENG Mu

Central South University / Visiting Researcher, NINJAL [-2010.09]

Abstract

According to previous research, the early Taisho period marked the beginning of a dramatic increase in loanwords in Japanese. The investigation reported in this paper used 10 new-word dictionaries to extract a sample of 17,911 loanwords. The Taisho period was divided into three sub-periods (early, mid, and late), and each sub-period was examined quantitatively.

The results show that about 80 percent of the loanwords in the sample were listed in the early Taisho sources, which means that many of them were borrowed into Japanese in the Meiji period or earlier. In addition, each sub-period of the Taisho period showed different characteristics.

Key words: Taisho period, loanword, new-word dictionary